HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	パレートとクローチェ
Author(s)	佐藤, 茂行
Citation	經濟學研究, 40(4), 26-38
Issue Date	1991-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31871
Type	bulletin (article)
File Information	40(4)_P26-38.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

経済学研究 40-4
北海道大学 1991.3

パレートとクローチェ

佐藤茂行

本稿ではパレートの実証主義の立場と，これと関連した，かれの科学方法論の特徴をパレートとクローチェの論争を素材にしながら明らかにしてみたい。

I パレート・クローチェ論争

パレートとクローチェの論争については「経済学者雑誌」(Giornale degli economisti) 上での公開論争（1990-1901年）が知られている[1]。しかし，実は，この公開論争に先立って，両者の論争は，すでに私信を通じて行われており，また公開論争以後も，下火の一途をたどっていたとはいえ，折りにふれて続けられている。

パレートとクローチェとのかかわりは，クローチェがマルクス主義にかんする論文をパレートに送ったことから始まる[2]。そして，これらの論文をめぐり書簡の往復を通じて論争が続けられた後，ついにクローチェの側から『経済学者雑誌』上での公開論争に踏み切るといった経過がたどられる。その後，直接的な関係としてはパレートの『社会主義体系』や『経済学提要』に対するクローチェの書評と，これに対するパレートの反論が展開されている。

これら私信を含む一連の論争を通じて示された両者の基本的対立は，つぎのようなものであった。クローチェが認識において本性とか基本原理といったものを重視したのに対して，パレートはそれらを形而上学的な実体と見なして，あくまでも拒否し続けたということである。二人は自由主義的心情を共にしながらも，認識論をめぐる立場にかんしては結局，最後まで並行線をたどったのである。

以下，このような両者の対立をつぎの三点に絞って検討してみよう。第一が分析的方法をめぐる問題，第二が経済学における基本的事実をめぐる問題，そして第三が以上の二点にかかわる科学の対象としての「事実」の取り上げ方をめぐる問題である。

1. 分析的方法をめぐる問題

パレートは，かねてから，現実をまず分析的方法によって分析し，そのうえでそれらの分析結果を複合して現実を再構成（総合）するような「科学」のあり方を主張していた。他方，クローチェは現実の概念的な把握，すなわち概念によって事物の本性を総合的に把握する科学および哲学を志向していた。

クローチェはパレートに送った論文のなかで，こう述べている。「歴史の流れを概念的に要約できるという想定によって，歴史哲学は可能となる。ところで，歴史のなかに現れてくる現実のさまざまな要素を概念に要約できるとしても，その結果，道徳哲学や法哲学，科学哲学，芸術哲学，ならびに，これらの関係についての哲学がつくられるとしても，これらの要素を特徴づ

1) この論争についてはクローチェの思想的発展を追跡する見地からの紹介がある。〔12〕pp. 109-124. また，パレートとクローチェとの関係については Busino の研究がある。〔1〕pp. 77-120.
2) Lettera a Maffeo Pantalenoi, Losanna, li 19 dicembre 1896 〔6〕 p. 498.

ける複合体，もしくは歴史の流れとしての“具体的事実”を概念的に練り上げることはできない。これらの要素の複合体にあっては，歴史の運動は，発展の概念という唯一の概念に還元し切ることはできないだろうし，それは歴史本来の内容を完全に欠いたものとなるであろう」[3]と。

クローチェの，歴史法則の複合的把握を斥ける，こうした歴史哲学に対してパレートは私信のなかで，さっそく異議を唱える。その第一は，芸術とか，科学というのは現実的なことがらに照応した言葉であって，これらの概念は個人により時代によって異なる。だから歴史とか科学とは何かということを探求するよりも，むしろ，ある国のある時代の人びとが歴史をどのように把えていたかという問いに答える方がよい。第二は，「歴史哲学」というのは実証主義者のパレートにとっては「人間生活の出来事の一般法則（仮に，そうした法則が存在し，そして，それがわれわれに知られるとしたら）の探求」以外に考えられない。そして第三は，歴史は，分析にもとづく具体的な理論の複合体として把えられるというものであった[4]。

このうち第三の異議申し立てはパレートの分析的立場を端的に示すもので，歴史の総合的把握を主張するクローチェの見解と真っ向から対立している。翌年にはこう書かれている。「総合的ということからすると，社会学が歴史であることは確かです。鉱物化学が鉱物学であると言えるのと同じように。ところで，歴史は現象の総体を研究します。そして，そこには，この総体をさまざまな部分にわけて，それらを個別的に研究する科学の存在理由があります。たとえば，宗教の理論とか統治の理論など。これらの科学にはなすべきことが確かにまだあります……分析に訴えることなしに，また具体的現象を部分に分けることなしに，そしてこれらの部分を別々に研究したうえでそれらの部分を総合によって再結合することなしに一定の限界を超えて進歩しうるような，どんな人間の認識もありません」[5]と。こうしたパレートの分析的立場は後に，公開論争のなかで，つぎのように表明される。「具体的現象は，もともと一つのものである。主観的な困難から，われわれは，やむなく，この現象を多かれ少なかれ任意の部分に分割するのである。こうした分割または分析から，さまざまな科学が生まれる」[6]。

以上から，クローチェの総合的立場とパレートの分析的立場との相違は明白であろう。

2．経済学における基本的事実をめぐる問題

ここでは純粋経済学における力学的方法，ならびに「選択の理論」をめぐる「経済的事実」の基本性格が問題となる。これらの問題の議論を通じてクローチェは基本的な経済的事実とは経済的評価を伴った実践的行為であるという主張を行う。他方，パレートは，この主張に対しては直接応えず，かれ自身の「選択の理論」で確立した実体否定の新しい立場を力学的方法の問題とともに再確認する。以上から窺えるように，これらの問題にかんしても両者の議論はかみ合わないまま進行する。

クローチェは，すでに1898年に，パレートの弟子であったラッカの批判に応えた論文のなかで，純粋経済学の信奉者は，いかなる科学的方法も確立せず，「依然として利己主義の概念，最小手段の法則，主観主義，心理主義，快楽主義，幸福主義（eudemonismo）の間で戸惑っている

3) Sulla forma scientifica del materialismo storico〔2〕pp. 2-3.

4) Lettera a Benedetto Croce, Losanna, li 27 maggio 1897〔4〕p. 341.

5) Lettera a Benedetto Croce, Losanna, li 25 dicembre 1898〔4〕p. 380.　全集版のテクストでは鉱物化学（la chimica minerale）ではなく一般化学（la chimica generale）となっているが，これは誤植であろう。Busino は，これを la chimie minérale (la chimica minerale) と読んでいる。〔1〕p. 83.　本稿では，この読みにしたがった。

6) Sul fenomeno economico : lettera a Benedetto Croce〔5〕p. 433.

ように思われる」として，なによりも，まず基本的な経済的事実を確定する課題が純粋経済学に残されていることを指摘していた[7]。そしてクローチェは，まずパレートの1889年12月の覚書「純粋経済学の問題はどう提起されるか」を読んで，パレートが経済的事実と力学的事実を同一視していると判断する。続いて1900年3月の『経済学者雑誌』に発表されたパレートの論文[8]のなかで「選択(scelta)」という新しい経済的事実が提示されているのを知る。クローチェは，これらのパレートの主張がいずれも基本的な経済的事実を確定する問題にかかわると判断して，ついに公開論争の火蓋を切るに至る。

そこで，まず，この公開論争のきっかけとなったパレートの経済学における力学的方法と「選択の理論」について確認しておこう。まず力学的方法について。パレートは1889年の前記「覚書」のなかで，つぎのような説明をしている。ロビンソン・クルーソーのための理論ではなく，社会生活をしている人間を前提した経済理論にあっては，どうしてもこれらの人間の間の作用と反作用の相乗的関係を扱わなければならない。幸いなことに，こうした研究には，これと類似した問題を扱っている理論力学の手法が適用できる。すなわち，いわゆるホモ・エコノミクスを理論力学の質点に見立てるならば，力学上の質点の均衡を決定する問題とホモ・エコノミクスの快楽の最大値を決定する問題とは同じである。したがって，これらの問題はいずれも同じ均衡方程式によって解くことができるのは明らかだと。ここからパレートは純粋経済学が「単に力学に似ているというのではなく，それは厳密に言って，力学の一種なのである」と主張していたのであった[9]。

つぎに「選択の理論」について。パレートは，論争のなかでも自認しているように[10]，1896-97年の『経済学講義』では，人間が最小の苦痛で最大の快楽を得ようとするという想定に立った，いわゆる快楽主義の原理を前提していた。しかし，パレートは，1900年3月の前記の論文では，こうした原理から導き出される実体的な効用の概念を排除し，パレート自身が規定していたオフェリミテも，この実体的概念から切り離す。そして，そうした実体を測ることができるという，いわゆる効用の可測性を想定した立場を放棄する。こうして，その代りに「選択」という「純粋かつ単純な」経験的基本事実から出発して「選択の理論」を構成したのである。

たとえば，この論文のなかでパレートは選択の事実については，その選択の動機を研究する必要はないと述べて「犬はスープよりも肉を選好する。猫はネズミを追いかけるよりも眠ることを選好する。人間は棒で10回打たれるよりも，うまい昼食を選好する。……動機が何であれ，選好の事実は，それによって，より多くの一つの快楽がえられることを示しているのである」と説明し，また同じく，そこでは，快苦の計算も無益であると主張している。そして「実際に，また純粋経済学の方程式は，より一般的なかたちで選択の事実を表現しているにすぎないのであって，この方程式は快楽とか苦痛の概念とは無関係に導き出されたものなのである」と述べているのである[11]。

ちなみに，公開論争のなかでは，このような「選択の理論」にもとづいた純粋経済学の研究が，概略つぎのように説明されている。それは，選択によって表明されるいくつかの好み(gusti)をもち，それらの好みを満足させるために障害(ostacoli)につき当たる幾人かの個人によってもたらされる経済現象の相互依存関係を明らかにするものである，と[12]。以上が公開論争のきっかけとなったパレートの主張の概要である。

7) Marxismo ed economia pura〔2〕p. 160.
8) Sunto di alcuni capitoli di un nuovo trattato di economia pura〔5〕pp. 365-423.
9) Comment se pose le problème de l'économie pure〔8〕p. 107.
10)〔5〕p. 428.
11)〔5〕pp. 371-372.
12)〔5〕p. 429.

さて，クローチェは，公開論争の最初の論文で，まず，経済的価値と経済的原理にかんする論議を深める必要を指摘したうえで，経済学が「経済的原理という，まさに，はっきりとした固有の原理をもった科学である」こと，そして，この原理を明確にし，その特性を正確に描くことが不可欠だと述べて，これらの問題と深く関連したパレートの「選択」という経済的事実について検討を始める。

まず，クローチェは，経済が現実には人間の行為と結びついていることを確認したうえで，パレートが「選択」と呼んでいる経済的事実が，一つの感情にもとづく行為であり，意識的な決断の結果であること，したがって，それはパレートが「覚書」で主張しているような力学的事実では，けっしてなく，人間的行為の事実であることを指摘する。そしてクローチェは，1）この事実は経済的に見て適切か否かという意識的な決断つまり経済的評価を伴った事実であること。2）また，同時に，それは，適切であり有用であれば快，そうでなければ苦であるといった，快苦の感情を伴った事実であると主張する[13]。

つぎに，経済的事実が人間的行為の事実だとしても，この事実が認識の事実なのか意欲の事実なのか，あるいは理論的行為なのか実践的行為なのかが問題となるが，クローチェは「選択することは何かを欲求するというのでなければ意味をもちえない」として，結局経済的事実は「意欲すなわち（ossia）実践的行為」であるという見解を示す。そのうえで，この実践的行為が道徳的価値にかんしては中立的，つまり道徳的良し悪しとは無関係な行為であることを明らかにする。そして結論としてクローチェは「基本的経済的事実とは経済的評価を伴った実践的行為である」という主張を行うのである[14]。

なお，経済的価値の問題についてクローチェは，快苦の感情と結びついた判断にもとづく経済行為を主張していたところからも明らかなように，パレートがすでに放棄した「快楽主義的原理」を前提とする「価値」の存在を認め，同時にその価値の可測性をも主張していた。力学的でないものは計測できないどころか，計測できる。つまり経済的価値は計測されるというのである[15]。

さて，以上のようなクローチェの主張に対してパレートはどのように対応したか。それをつぎに見ることにしよう。まず，クローチェが要請していた「経済的原理」の問題にかんするパレートの見解は，前記1889年の「覚書」のなかで，すでに実質的に示されていた。それは要するに，仮説から導き出された結論を経験的真理と突き合わせ，結論が真理と合致すれば，その仮説は受け入れられ，合致しなければ，その仮説は拒否されるというものであった[16]。この考え方からすれば，こうした意味での仮説がありさえすればいいのであって，ことさら経験を超越した「原理」などといった実体的概念を想定する必要は，まったくないということになる。このような見解をもちながらもパレートは公開論争のなかでは，仮説の有効性を説くことはあっても，この種の原理の必要性にかんしてはクローチェに正面きって反論してはいない。

では，経済学の認識対象が物ではなく人間の行為であるというクローチェの主張についてはどうか。パレートはその主張を実質的にこう理解する。クローチェは「ある事柄を研究するには，その事柄の本質（l'essenza）とか起源を知る必要がある」と考えている。そのような考えがあるからこそクローチェは行為の対象となる「物」ではなくて「行為」そのものを研究しなければならないと言っているのだ，と[17]。つまり，

13) Sul principio economico : due lettere al prof. V. Pareto〔2〕pp. 210-215.
14)〔2〕pp. 216-219.
15)〔2〕p. 212.
16)〔8〕p. 102.
17)〔5〕p. 438.

ここでパレートはクローチェが経済的行為そのものを研究することによって，その行為の「本性」(l'indole) や経済的事実の「本質」を知る必要があると主張しているものと受け取っているのである。

また，クローチェが問題とする「価値」の概念については，改めて指摘するまでもなく，パレートはこれを拒否している。パレートは快苦の計測は誰もできないこと，したがってクローチェが考えている「快楽の指標としての価値」も計測できないことを例示によって明らかにし，「選択」という事実に注目すべきことを示唆している[18]。

ところで，価値の問題と関連して実体的なものを否定するパレートの興味ある説明がなされているのでここで紹介しておこう。それは，この論文のなかで，実体的概念としての価値を否定する際にパレートが力学における力の概念の否定との類比で，それを説明している部分に示されている。パレートは「覚書」のなかの「純粋経済学は力学の一種である」という主張に対するクローチェの批判に応えて，その真意を釈明し，そこでは明らかに，両者が同一だというのではなく，類似しているということを言っていたのだと述べたうえで，こう書いている。「快楽主義の原理をもってすれば，この類似は大きなものであった。というのは，純粋経済学には力学の「力」(forza) を思い浮かばせる何ものか (qualche cosa) があったからである。選択という事実をもってすれば，そうした何ものかは，もはや無い。けれども，力学もまた同じようにして力を抜きにして研究することができる。そうすることによって困ることは実質的にはほとんどないのである」[19] と。

3. 「事実」の取り上げ方をめぐる問題

ここでは，経済学を中心にした，科学における事実の選択の問題をめぐる両者の対立を見ることにしよう。この問題にかんする論争は，すでに明らかにした，パレートの分析的立場と実体否定の立場を一層鮮明にすると同時に，この立場に孕まれている問題点をも明らかにするものであった。そこで，以下，多少くわしくその内容を紹介しておくことにしよう。

パレートは，クローチェが主張する人間の実践的行為に関連して，商品の生産および交換の活動について触れ，パレートの関心が，これらの実践的行為が生み出す経済的現象が示す斉一性にあるとしたうえで，純粋経済学は，これらの現象全体が示す，いくつかの側面をもっぱら追究するのだと述べる。そして，このことを類比によって，こう説明している。「あなたが具体的現象から切り取った大きな切り身 (grossa fetta) から，私は，新たに小さな薄い切り身を切り取って，それを研究したいと思っている」[20] と。ここで述べられている現象全体とは現実の総体のことであり，大きな切り身とは経済現象，そして小さな薄い切り身とは純粋経済学が扱う現象を指しているものと解釈できる。

ともあれ，こうしてパレートによれば，純粋経済学は，ある特殊な仕方によって経済現象の，ごく限られた一部を研究する。言い換えると純粋経済学は「一つまたは，少数の仮説，一つまたは，少数の事実から，もっぱら演繹するといった特殊な仕方によって，その現象の一部を研究する」[21] というのである。

このように，経済学は具体的現象の一部を切り取って研究するというのがパレートの主張であった。すでに触れたように，パレートにとって具体的現象は本来一つのものであって，科学は，これを多かれ少なかれ，いくつかの部分に分割して研究するのであり，この分割こそは科学の成立条件の一つなのであった。

ところで，このような分割または分析は，具

18) 〔5〕p. 429, pp. 435-436.
19) 〔5〕p. 431.
20) 〔5〕p. 425.
21) 〔5〕p. 432.

体的現象からの部分の抽出を意味する。したがって抽出されたその部分は実在しているわけではない。だから経済現象もまた客観的に実在するものではなく，それは一定の目的にもとづいて具体的現象の総体を区分してえられた一つの抽象でしかないということになる。ここから「経済現象とは何か」を探求することは無益であって，それを問うのなら，むしろ，その抽象の内容を問うべきである。つまり，ある時代に生きている人びとが経済現象として何を思い描いているか，その内容を知るべきだというのである。パレートは言う。「私は客観的に経済現象があるとは信じていない。だから経済現象とは何かを探究するのは無益であるように思っている。私にとって，経済現象は人びとが行う一つの区別でしかない。したがって，この現象にかんして言うならば，ある時代に生きているある人びとが，この用語によって何を意図しているかを知ることを目的とした探究しか考えられないのである」[22] と。

さて，それでは以上のようなパレートの説明に対してクローチェの反論はどう展開されていたか。クローチェによると具体的現実の一部を切り取るためには，一定の基準が必要である。その基準となるものは対象の本性である。したがってクローチェは，その本性をこそまず把握しなければならないと主張する。すなわち，クローチェはパレートが具体的現象から切り身を切り取るというとき，それをどのように切り取るのかを問い，こう述べている。「切り身を切り取るためには論理分析を行わなければならない。言い換えると，あなたが後からやると提案したことを最初にやらなければならない。あなたが説明のなかで対象として仮定しているものと，それから切り離されたものとを区別するために，あなたは一つの基準（un criterio）を前提している。しかし，その基準となる概念は，その事物の本性（natura）そのものによってしか得ることはできないのであって，基準または基準となる概念は，そうした本性に従わなければならないであろう」[23] と。

このようなクローチェの主張に対してパレートは，当然，事物の本性なるものを否定し，1）具体的事物そのものだけが対象であり，2）選択の基準となるものは，任意に設定されうる研究目的である。したがって，3）本性に対応する基準があるとしたら，それは，こうした研究目的以外にはありえないと反論する。そして，パレートは「われわれの意見の不一致は唯名論者と実念論者との間の非常に有名な意見のくい違いに，まさしく遡ることができる」としたうえで，こう述べている。「私は唯名論者のうちでも，もっとも徹底した唯名論者である。私にとっては具体的事例だけが客観的なものである。この具体的事例の区分けは，われわれが行うのであり，したがって，一つの区分けの目的を常に任意に設定するということを除けば，その区分けは任意なものなのである。この場合，区分けはその目的から理論的に導き出されてくるのである」[24]。

以上の選択の基準とかかわってクローチェの注目すべき指摘がなされているので，最後に，それを記しておきたい。その指摘というのは，パレートが「潜在的な形而上学的前提」を抱いているというものである。クローチェは，そのパレートの前提として，つぎの三つを挙げている[25]。1）人間の行為の事実は物理的事実と同じ性質をもつこと。2）そのいずれについても，その規則性を観察して，その規則性から結論を導き出すことしかできないのであって，その内在的な本性には入り込むことはできないこと。3）これらの事実は，すべて等しく「現象」であること。要するに，クローチェはパレートの「実体否定の立場」そのものが一つの「形而上

22) 〔5〕p. 444.

23) 〔2〕p. 221.

24) Sul principio economico 〔5〕p. 448.

25) 〔2〕pp. 222-223.

学」だと言っていたのである。このことはパレートの実証主義の立場もまた，ある価値判断を前提としているという点を衝いているわけで，きわめて重要な指摘と言える。

これに対してパレートは「私は物自体(noumeni)を何ら前提してはいない。まったく知らないものを，どうして前提できるだろうか。私について言えば，事実と具体的事例だけを，つつましく研究し，それらが，どのような「規則性」と類似を示しているかを探究しているのである」[26]と反論していたのである。

II　パレートの検証主義と価値判断

パレートの科学論の基本的立場は経験主義である。そして，それは真理の基準は経験的事実にあり，それらの経験的事実を超越したどんな実体も前提しないという点で実証主義の立場でもある。

パレートにおいては，これらの事実は客観と，それを反映する主観という，いわゆる主客の二項対立の構造のなかで把えられ，その結果，科学研究には主観的事実を客観的事実に合致させるという，たゆまぬ努力が要請される。また，このような科学研究にあっては，経験的事実にもとづく仮説が設定され，この仮説から導き出された結論を経験的事実によって検証するという手続きがとられる。この場合，現実の総体を一挙に把えることは不可能であるから，一定の任意の目的にしたがって現実の一面を選択し，こうして得られた対象について上記の仮説—検証の手続きを適用すべきだというのである。

以上，パレートの科学論は，超越的実体を拒否して，もっぱら経験的事実にのみ依拠する経験主義と，主観—客観図式にもとづく検証主義から構成されていた。そこで，以下，これらについて順次，論評してみよう。

まず，経験主義について。これはパレートの思想の根底にあって終始変わることのない確固とした基本的立場であった。パレートは経験的領域を超えた，どのような実在をも認めようとはしなかった。そして，そうした実在を認める立場を形而上学的あるいは宗教的立場とみなし，科学的立場つまり論理・実験的立場からこれを断固として拒否したのであった。したがって「形而上学者」クローチェとの論争は，このようなパレートに改めて形而上学との断絶の深さを実感させたに違いない。科学論との関連からすれば，こうしたパレートの経験主義の立場が，その自然科学的素養のもとで形成されたことは明白であった。

1900年3月に発表された，無差別曲線に表現される「選択の理論」は経済学の分野における実体の否定を宣したものであり，労働にもとづく価値はもちろんのこと，効用も実体としては導入する必要はなく，そうした実体を想定しなくとも現象の相互依存関係そのものの解明は可能であることを示した点で注目される。そこには実体認識に対する関係認識というパレートの科学的見地が前提されていたのである。

ところで，パレートは，このような実体否定の見地を同時代のH.ポアンカレと共有していた。すでに紹介したように，パレートはクローチェとの論争のなかで効用概念を不要とする主張と関連して，力学における力の概念にかんしても同じことが言えると述べていた。そこでの説明をポアンカレの『科学と仮説』のなかの，つぎの記述と対照して見ても両者の共通性は明らかになる。ポアンカレは，こう述べている。「力が運動の原因だというとき，人は形而上学をやっているのである。そして，この定義は，それだけで十分なはずだというのなら，まったく不毛なものとなるだろう……力それ自体(en soi)が何であるとか，力が運動の原因なのか結果なのかといったことを，その定義からわれわれが教えてもらう必要は少しもないのである」[27]。パレ

26) 〔5〕p. 450.

27) 〔11〕p. 118：〔16〕p. 127.

ートの形而上学批判と結びついた，力の概念にかんする説明の見地は，こうしたポアンカレの見地と同一であり，また，そのことは，すぐ後に触れる事実からしてパレート自身十分承知していたことは疑う余地がない。

同じことは現象の関係把握についても言える。現象の相互関係こそが科学の対象であるとするパレートの見地はポアンカレのつぎの主張と共通している。「……科学が到達しうるのは，素朴な独断論者が考えているように，物それ自体ではなく，物の間の関係にすぎない。この関係以外に認識しうる実在はない」[28]。

以上のような考え方がポアンカレばかりでなくE.マッハにも見られることは周知の事実である。ポアンカレを例に挙げたのは，たまたまパレートが『経済学提要』の注で二箇所ほど『科学と仮説』からの引用を行っているからである。ただし，ポアンカレのパレートへの直接的影響を確証することは困難であり，また，ここではそれを確証する必要もない。

さて，実体否定の立場を見たので，つぎにパレートの検証主義について検討してみることにしよう。すでに指摘したようにパレートの検証主義は，仮説→演繹→検証といった手続きを基本として成り立っていた。ここでは検証の問題に焦点を絞って考察してみたい。

パレートの経験主義が「同時に観察される事実をもっぱら記述する」といった「純粋の経験主義 (l'empirisme pure)」[29]でなかったことは，かれが仮説検証の手法を主張していたことからも明らかである。そして，それは，かれが素朴な帰納主義者でなかったことをも物語る。パレートは，1891年12月9日付のパンタレオーニ宛の手紙のなかで，「実験的に検証されないものは疑わしい」と述べた後で，「しかし，だからといって，私は演繹的方法を拒否すべきだと言うつもりは毛頭ありません」と付け加える。そのうえで，J.S.ミルの演繹的方法について触れ，こう述べている。「……あのミルは，経験に裏づけられた結論を演繹的方法によって検証することを通じて帰納法の使い方を実に見事に説明しています」[30]。

ここで指摘されているミルの方法が，いわゆる「逆の演繹法」であることは明らかである。ミルは社会科学の方法として具体的演繹法を挙げている。具体的演繹法というのは，いくつかの原因または仮説から演繹された結果（結論）を具体的な現象（事実）または経験的法則と照合する方法のことである。この方法には，その結論を直接，事実によって検証するやり方（直接的演繹法）と，これとは逆のやり方（逆の演繹法）とがある。逆の演繹法というのは，特殊な経験の注意深い検討によって獲得された暫定的な結論（仮説）を，後から演繹的推論によって一般原理と結びつける方法のことである。ここでは結論がまず与えられ，その後で一般原理からの演繹が行われるという意味で逆の演繹というのである[31]。この方法によると結論は，事実ではなく演繹的推論によって検証されることになる。パレートが「経験に裏づけられた結論を演繹的方法によって検証する」と言っているのはこのことを指す。

パレートのこうした逆の演繹法にたいする高い評価は，かれが，単純な帰納主義者でないことを示している。しかし，逆の演繹法といえども，一般的原理が経験的事実を通じて確かめられるという構造に変わりはない。パレートは依然として肯定的事実による仮説検証の反復を通じて客観的現実に接近するという伝統的な帰納主義の基本的立場を放棄していたわけではないのである。

ところで，パレートには以上のような検証主義とは相容れない，いわゆる規約主義と一見結びついているように受け取れる主張が見られる。

28) 〔11〕p. 25：〔16〕p. 15.
29) 〔9〕p. 1589：〔14〕p. 229.
30) 〔6〕p. 107.
31) 〔3〕Chap. 9, 10：〔3〕p. 916：〔13〕p. 149.

すなわち，パレートによると，事実は，さまざまな無数の理論によって表現されたり説明されたりすることができ，そして，それらの理論は「事実をうまく表現しているという意味で」等しく真であること，また，それらの理論のいずれを選択するかは，一定の限界内では恣意的であることなどを主張しているからである。

しかも，規約主義の立場を連想させる状況証拠ともいうべき事実も揃っている。すでに紹介したように，パレートは『経済学提要』のなかで，科学理論の相対的価値を説明する際に，ポアンカレの『科学と仮説』の一節を引用している[32]。その引用部分でポアンカレは物理学の理論の意義を説明しながら，光学的現象の予見という目的からすると，フレネルのエーテルの理論もマクスウェルの理論と同様，依然として相対的価値があるということを明らかにしていた[33]。実はパレートもクローチェとの論争のなかで，実体批判の説明に関連してエーテルの理論仮説と万有引力の理論仮説とを比較し，似たような説明を試みている[34]。以上のような経緯と，さきに指摘したポアンカレとパレートとの共通性を考え合わせると，規約主義を思わせる前記の主張から，パレートもまたポアンカレと同じ規約主義の立場をとっていたのではないかという推測が生まれても不思議はない。だが，この推測は当たらない。

まず，そのポアンカレの規約主義について確認してみよう。ポアンカレによると規約(conventions)は仮説のかたちをとった原理のことである。それは経験から直接導き出されるものではなく，われわれの精神の自由な活動の産物であり，精神が下す決定(décrets)を表す。ただし，だからといって，この規約は，まったく恣意的というわけではない。経験的事実または実験にもとづいて，その規約が便利である(commode)という判断があったうえで，それが適応されるからである[35]。このようにポアンカレの規約主義は，経験科学にかんするかぎり，経験的事実を前提したうえで，それらの事実の間の関係を一般化するときに，規約を適応するというものであった。言い換えると，ポアンカレの規約主義というのは，実験的法則から普遍的法則を導き出すときに，規約（仮説）を用いなければならないという考えである[36]。ポアンカレのこうした主張の根底には，実験的仮説の検証を何度くり返しても，その仮説を一般化することは不可能であるという判断がある。またポアンカレは，規約つまり一般的仮説は経験から直接導き出されたものでない以上，この仮説によって得られた一般法則は経験によっては確証されず，したがって経験と矛盾することもないと考えていたのである[37]。

ちなみに，ポアンカレは一般に仮説をつぎの三種類に分けて，規約が仮説の形で表明される場合があることを指摘している。第一が検証されうる仮説，第二が考えを定めるのに役立ちうる仮説，そして第三が見かけは仮説だが内実は規約または定義であるような，いわば扮装した(déguisées)規約に帰着する仮説がそれであるという[38]。

さて，以上の点を確認したうえで，改めてパレートの理論仮説にかんする主張を振り返ってみよう。さきに紹介したような主張の部分だけを見るかぎり，パレートは，たしかに規約主義の見地をとっているように見える。しかし，これらの主張が行われている文脈を検討してみる

32) 〔7〕p. 49.
33) 〔11〕pp. 173：〔16〕p. 190.
34) 〔5〕p. 428.
35) 〔11〕p. 24：〔16〕p. 14.
36) 〔11〕p. 152：〔16〕p. 166.
37) 実験的に（expérimentalement）検証された法則を一般化した場合「もはや経験（l'expérience）は，これを確認もしないし，これと矛盾もしないことを，われわれは知っている」。〔11〕p. 117：〔16〕p. 126. なお，ポアンカレに限らず，規約主義の一般的な特徴についてはラカトシュの説明を参照。〔17〕pp. 157-158.
38) 〔11〕p. 24：〔16〕p. 14.

と，パレートの見地が依然として検証主義にあることが確かめられる。

まず『経済学提要』のフランス語版の一節をとってみよう。そこでは，こう述べられている。「同一の事実は無数の理論によって説明されうる。これらの理論は，すべて等しく真 (vraies) である。というのは，これらの理論は説明すべき事実を再生産するからである」。この文章は，フランス語版で新たに付加されたものであって，これに先立つパラグラフでは，客観的関係を反映した主観的関係が「多少複雑になったものが理論と称される」としたうえで，この「理論は経験と一致するとき真 (vraie) と見なされる。この一致以外に科学的真理の基準はないし，また，ありえない」と述べられている。そして，この文が節全体の主題となっているのである[39]。

これと同じ文脈の構造をもった説明が『一般社会学概論』にも見られる。ここには「あるいくつかの事実が与えられたと仮定した場合……問題のデータを等しく十分に満足させるさまざまな理論がありうる」という主張が見られる。だが，これも実は，「科学的理論は，たんなる仮説にすぎない。その仮説は，それが事実と一致する限り生き続け，新しい理論によってその一致が破られるとき，それは死滅する」という文章を受けた主張なのである[40]。

さらに，この著作には以下のような見解も示されている。「一般原理は事実を表現するためにつくり出された抽象観念にすぎない。一方，つぎのことが認められる。それは，事実をうまく表現しているという意味で等しく真であるような，さまざまな理論がありうること，また，これらの理論のなかから，どれを選ぶかは，一定の限界内では恣意的であるということである」[41]。

ここで理論というのは「問題のデータを等しく十分に満足させる」理論つまり仮説のことを指している。パレートにとって「科学的理論はたんなる仮説にすぎない」ものであった。したがって，その限りで事実または関係を説明しうる仮説は無数にありうることになる。そして，それらは事実を説明しうるという意味で，いずれも真と言えるというわけである。また，どの仮説を選択するかは恣意に任されている。たとえば「簡明である」という理由によって，ある仮説を選択するというように[42]。

しかし，これらの仮説は，あくまでも「事実を説明しうるという意味」で真なのであって，その「説明それ自体の真偽」については，やはり事実によって検証されなければならないとパレートは考えているのである。言い換えると，仮説にかんして恣意的選択が許されるのは，それらの仮説が経験によって検証されるという保証があるからである。このことをパレートは，こう明言している。「仮説のすべての価値は，その仮説が見い出されたやり方ではなく，それに続く検証から引き出される」[43]と。

そこで，問題は，この仮説が経験によって直接検証されるか否かという点に絞られる。つまり，規約主義とのかかわりから言うと，規約主義か否かは，これらの仮説が経験または事実によって検証されうると主張するか否かによって判定される。ポアンカレの仮説（規約）は経験によっては検証されえない性格をもっていた。これに対してパレートの仮説は，あくまでも経験や事実によって検証されるべき性格をもっていたのである[44]。

パレートの仮説が規約とは明確に区別された，ポアンカレの第一の仮説つまり検証されうる仮説に相当することは明らかであろう。このよう

39) 〔7〕pp. 43-44.
40) 〔9〕p. 22.
41) 〔9〕p. 26.
42) 〔9〕p. 22.
43) 〔9〕p. 1589 : 〔14〕p. 229.
44) 以上のことは，パレートが規約に相当する一般法則（斉一性）を否定し，経験的な特殊法則のみを認めていることによっても裏づけられる。〔7〕pp. 7-8. パレートの立場は一貫して仮説の経験による検証の積み重ねによって現実への接近を図るというものであった。

にパレートは実体的なものを否定するという意味での実証主義者ではあったが，けっして規約主義者ではなかった。パレートの考えが規約主義になじまなかった最大の要因は，その主客二元論にもとづく反映論にあった。パレートは，規約主義の立場をとるにしては，あまりにも伝統的なカメラ図式の枠にとらわれていたのである。

とはいえ，パレートは古典的実証主義者に比べてはるかに洗練された見方をしていた。それは認識手段としての理論がもつ相対的性格についての見方にもある程度示されている。まず挙げられるのは，分析の結果としての理論がもつ抽象的性格の認識であろう。この見方はクローチェとの論争のなかの「私は客観的経済現象があるとは信じていない」という懐疑的言い方に集約的に示されている。第二はパレートが抽象作用および抽象観念を「事実」のなかに含めて考えていたことである。これは主観的現象を一つの「事実」として把握していたところからも明らかである。パレートが「機械論的な」実証主義のドグマから解放されていたことは確かであった[45]。

さて，以上のようなパレートの検証主義の特徴を確認したうえで，最後にクローチェとの論争を素材にして，その検証主義に含まれている問題点を指摘しておこう。クローチェが公開論争で提起していた「本性」にかんする問題はパレートの検証主義の根幹を揺るがす問題を含んでいた。その第一は，事実の選択をめぐる検証主義の限界の問題であり，第二が，その際の価値判断の問題である。

まず検証主義の限界の問題について。一般に実証主義者のアキレス腱は，かれが常に回帰してやまない経験的「事実」にある。多くの実証主義者にとってその「事実」は絶対的なものであり，また同時に与件でもあった。そうした実証主義者のなかにあって，パレートは相対的な見方を堅持してはいたが，しかし，経験的「事実」を重視する点では変りなかった。クローチェは，その「事実」の意味に対して根本的な問いを投げかけたのであった。その問いは，事実の選択に際しては基準が必要であり，その基準は事実がもっている本性から引き出されなければならないというものであった。事実の本性についての理解は事実の「意味」の理解である。したがって，クローチェのこの主張は事実の選択以前に，すでに，その事実にたいする意味づけが行われているという主張にほかならない。このような事実の意味づけは，科学にあっては，仮説または理論による事実の評価という形をとる。すなわち科学における事実の選択は一定の理論仮説にもとづいて行われるということである。したがって，クローチェの主張は「事実の選択には理論（仮説）が前提されている」と言い換えることができる。そうだとしたら，仮説を事実によって検証するというパレートの考えは，検証されるべき仮説自体が検証データ（事実）を選択するという結果になる。つまり仮説を実証するデータが仮説そのものから引き出されるということになる。この結果，仮説の実証または検証が同語反復と同じような循環論に陥ることは明らかである。要するに，クローチェは，検証されるべき事実がすでに理論（仮説）によって選択されているという，いわゆる事実の理論負荷性を実質的に指摘していたのである。

このように，クローチェの批判はパレートの検証主義を根本から掘り崩す可能性をもっていたにもかかわらず，すでに紹介したように，それ以上の追及は行われないままに終わった。他方，パレートはそうしたクローチェの批判を形而上学者のたわごととして一蹴したため，パレートの検証主義の限界は結局，不問に付されてしまったのである。

つぎに価値判断の問題について。クローチェが，パレートには「潜在的な形而上学的前提」があると指摘していたことについては，すでに触れた。「唯名論者」を自負するパレートにとっ

45) 〔10〕p. 293 : 〔14〕p. 254.

て，この指摘は心外なものであったろう。パレートは，この批判に，さっそく反発する。しかし，ここでもまたパレートはクローチェが提起した問題を深刻には受け止めていない。パレートは，その「形而上学的前提」なるものを「物自体」と受け取って，そのようなものは「知らない」としてその問いを拒否したのであった。

だが，クローチェが問題にしていたのは，その具体的な指摘からも明らかなように「物自体」ではなく選択の前提にあるパレートの「価値的態度」であった。言い換えると，クローチェは，選択された「経験的事実」には，すでにその選択に先立って一定の意味が与えられており，その意味付与はパレートの価値判断を含んだ前提に示されているということを指摘していたのである。

これに対してパレートは素気ない解答を与えたに止まるが，この意味付与の問題にかんする解答は，実はすでに触れたクローチェ宛の私信のなかで実質的に表明されていたと言える。すなわち概念とか言葉はパレートにとっては「物事の記号(segni)」であるがクローチェにとっては「物事の支配者(segnori)」であり物事それ自身であるという，言語について言及した私信のなかの一節[46]がそれを示している。改めて確認するまでもなく，言語は「物事の支配者」であると言うとき，パレートは，それを，いわば唯名論の立場からの実念論批判として述べていたのである。つまり意味付与を形而上学的営為と見なしていたのである。

したがって仮にクローチェの前記の問題提起をパレートがまともに受け止めていたとしても，対象に意味を与える問題はクローチェのそうした言語による認識つまり形而上学的な意味付与のことだとして，検証主義の問題と同様，一蹴していたに違いない。

同じように，仮にパレートが「形而上学的」という表現にこだわらずに，クローチェの具体的指摘に真正面から反論していたとすれば，おそらく，パレートは，それらの前提は仮説だと答えたであろうし，また，その仮説の根拠を問われたなら，それは経験的事実だと答えたであろう。さらに，仮にパレートが仮説の根拠ではなく，仮説の妥当性を問われたなら，それは経験的事実による検証から得られると答えたに違いない。

いずれにしても，議論は並行線をたどり続ける。そして，それはパレートがクローチェの指摘した自分の前提つまり実証主義的価値観を形而上学的「物自体」と同質のものと解釈して反発したところから生じる。しかしパレートのその価値観が事実の選択基準の前提となる「本性」つまり事物の性質にかんするパレートの判断を表現していたことは否定しえない。パレートはこの「本性 (natura)」を形而上学的な「物自体 (noumeni)」と受け取ってクローチェの問いを拒絶したのだが，この拒絶によってパレート自身の論理・実験的科学もまた一定の価値的態度の前提を免れえないという問題はついに自省されずに終ったのである[47]。

46) Lettera a Benedetto Croce, Bologna, li 21 marzo 1906〔4〕p. 563.

47) パレートは，価値的態度に結びつく感情の影響が論理・実験的科学においても，わずかながら存在することを認めてはいる．〔9〕p. 435.

参考文献

〔1〕 Busino, Giovanni, Pareto, *Croce les socialismes et la sociologie*, Genève, 1983.

〔2〕 Croce, Benedetto, *Materialismo storico ed economia marxistica* (*opere di B. Croce XII*, Editori Laterza, 1973).

〔3〕 Mill, J. S., *A System of Logic* (*Collected Works of J. S. Mill*, Vol. 8, University of Tronto Press, 1978).

〔4〕 Pareto, Vilfredo, *Correspondance 1890-1923, tome I* (*Œuvres complètes, tome XIX*, Genève, 1975).

〔5〕 Pareto, Vilfredo, *Ecrits d'économie politique pure* (*Œuvres complètes, tome XXVI*, Genève, 1982).

〔6〕 Pareto, Vilfredo, *Lettere a Maffeo Pantaleoni 1890-1923, vol. 1* (*Œuvres complètes, tome XXIV*, Genève, 1984).

〔7〕 Pareto, Vilfredo, *Manuel d'économie politique* (*Œuvres complètes, tome VII* , Genève, 1966).
〔8〕 Pareto, Vilfredo, *Marxisme et économie pure* (*Œuvres complètes, tome IX*, Genève, 1966).
〔9〕 Pareto, Vilfredo, *Traité de sociologie générale* (*Œuvres complètes, tome XII*, Genève, 1968).
〔10〕 Parsons, Talcott, *The Structure of Social Action Vol. I* (The Free Press, 1968).
〔11〕 Poincaré, Henri, *La science et l'hypothèse* (Flammarion, 1968).
〔12〕 上村忠男「哲学と科学のあいだ」「知の考古学」1975年3・4月号，1975年3月.
〔13〕 ミル，J.S.(大関将一訳)『論理学体系』VI(春秋社) 1959年.
〔14〕 パーソンズ，T.(稲上他訳)『社会的行為の構造』2 (木鐸社) 1986年.
〔15〕 パレート，V.(板倉・広田訳)『社会学大綱』(法政大学出版局) 1987年.
〔16〕 ポアンカレ，H.(河野伊三郎訳)『科学と仮説』(岩波文庫) 1967年.
〔17〕 ラカトシュ，I.(村上他訳)『方法の擁護』(新曜社) 1987年.